

保育者養成の今日的課題

—デジタル化時代の子どもの言葉獲得をふまえて—

千古 利恵子

コロナ感染拡大は、我々の生活に多大な影響を与えた。教育現場も変革を求められ、授業は非対面型に移行した。単位認定者である科目担当者は、変更が許されない「到達目標」を前に、新たな指導法の獲得に挑戦せざるを得ない。本稿では、保育者養成科目の担当者が直面したオンデマンド授業実施を検証し、改善すべき課題を明確にした。併せて、デジタル化時代の言語獲得環境の変化と保育現場での実践をふまえながら、オンライン教育による保育者養成の私見を述べる。

キーワード：オンライン授業、保育者養成、学習成果、言語獲得環境

1. はじめに

教育現場へのオンライン導入は、以前から話題になりながら遅々と進まなかったが、コロナ感染が拡大する中、2020年度前期授業は準備が整わないままでの開始となった。昨年と同一科目の場合、配付資料の修正は最小限にとどめ見切り発車せざるを得なかった。対面での資料が非対面での授業に適したものでない以上、オンライン授業に適した教材作成のポイント確認と指導法の開発が、科目担当者の課題になる。本稿では、保育者養成科目を非対面で実施する場合の課題を明確にし、指導法改善をはかりたい。

2. ICT時代とオンライン化の社会

近年、社会のICT化は急速に進んでいる。同時に学校教育現場にも、コンピューターやインターネットなどの情報通信技術を活用して行う教育が浸透している。政府は、平成30年6月15日付けで、第3期教育振興基本計画を閣議決定した。「教育政策推進のための基盤を整備」の一つとして「ICT利活用のための基盤の整備」を挙げ、「教師のICT活用指導力の改善」「学習者

用コンピューターを3クラスに1クラス分程度整備」などを「測定指導」としている。¹⁾小学生や高齢者でも簡単に操作できるスマートフォンが販売されるようになり、社会も人もオンラインで繋がるようになった。時代の変化は、言語に対する意識や活動にも影響を及ぼしているのである。

2-1 ICT化と日本語の変化

言語が時代とともに変化することは、我が国の言葉からも明らかである。SNSやLINE、Twitterなどの普及は、新たな言葉を生み出すにとどまらず、日本語に対する意識をも変化させている。それは、文化庁が毎年実施する「国語に対する世論調査」の結果からも明らかである。²⁾

2020年9月25日、文化庁は2019年度の調査結果を発表した。2019年度の結果は、2020年2月から3月に調査を実施し、16歳以上の男女1994人が回答したものである。注目すべきは「ふだんの生活の中で接している言葉から考えて、今の国語は乱れていると思いますか。それとも

乱れていないと思いますか。」という質問である。この質問は1999年度から5回設定されているもので、同庁が「国語の乱れ」を注視していることが分かる。2019年度は「非常に乱れていると思う」「ある程度乱れていると思う」(66.1%)で、2014年(73.2%)、2007年(79.5%)、2002年(80.4%)、1999年(85.8%)と比較すると、意識の変化は顕著である。「乱れている」と感じる具体的な内容は「敬語の使い方」「若者言葉」が60%強、「新語・流行語の多様」「挨拶言葉」が30%強である。敬語の使用法は、組織の構造改革や年功序列型の崩壊とも少なからず関係があるといえるのではないだろうか。特に注目すべきは「余り乱れていないと思う」「全く乱れていないと思う」の回答者が30.2%で、その理由として「言葉は時代によって変わるものだと思うから」(39.0%)「多少の乱れがあっても、根本的には変わっていないと思うから」(29.9%)である。学校教育では「話し言葉」と「書き言葉」の区別を教えるが、社会で出会う両者は、近年急接近している感がある。それを「乱れ」ととらえるかは、各自の意識で異なるということだろう。「根本的には変わっていないと思う」という回答理由は、言葉の教育の検討と指導法改善に取り組む上で、軽視すべきではないと考える。例えば「書き言葉」の「こんにちは」を「こんにちわ」とする表記が容認されている現状があるからだ。語意に関しては、2019年度の文化庁の調査からも、誤用がむしろ広がり市民権を得ていることも分かる。本来「恐れて不安を感じ、落ち着かずそわそわしている」の意味を持つ「浮足立つ」を「喜びや期待を感じ、落ち着かずそわそわしている」と誤用する人が増えていることも、その一例である。

2-2 オンライン教育と教育の機会確保

新聞紙上に「オンライン教育機会格差」(2020年9月19日発行、朝日新聞朝刊)の見出を付けた記事があった。内容は内閣府の生活意識の変化の調査を、法政大学准教授・多喜弘文(社会階層論)と早稲田大学准教授・松岡亮二(教育社会学)の両氏が分析を行った結果である。内閣府の調査は、全国の15歳以上の10128人を対象に実施し、末子が小中高校、高校生の1274人のデータを分析している。

【中学生の場合】

- ①学校から授業やメールでの学習指導を受けている：年収600万円以上40.4%、600万円未満20.6%
- ②学外(塾や習い事など)でオンライン教育を受けていた：年収600万円以上35.6%、600万円未満19.6%
- ③オンライン教育を受けていない：年収600万円以上33.6%、600万円未満55.1%

オンライン教育を受ける機会が、世帯の年収600万円を境に差が広がるというのである。また、機会の格差は居住地が東京や愛知、大阪の三大都市圏かどうかや親の学歴との関係も分析している。

【居住地】

三大都市圏内：約41% 非三大都市圏：約23%

【保護者の学歴】

大卒以上：約45% 非大卒：約20%

義務教育課程での格差が、今年度の高等教育機関に在籍する学生のオンデマンド教育の学習成果の検証に不可欠とは言えないが、オンデマンドでの指導法を考える上で、考慮すべき項目の一つとして認識する必要があるだろう。

3. 保育実践と言語教育

保育現場では、子どもを権利の主体として位置づけ、子どもの人格を尊重し健やかで豊かな育ちを支え促すために、様々な実践が行われている。保育実践では、子ども同士のやりとり、保育士等との関わりが重要である。言語の獲得量に関わらず、円満な人間関係を築くためにも、「ことば」は重要な役割を果たすのである。

3-1 言語教育の現状

「言葉とのふれあい」は、保育実践の重要な取り組みの一つといえる。保育現場には多くの児童文化財が準備され、保育者は子どもの発達段階に応じてそれらを適切に用いながら、言葉への興味を促し、他者と会話することの楽しさを体験させている。「話す楽しさ」を実感させるために留意すべきは、子どもの言語獲得の環境に関する知識である。「子どもの」というより、保育者が自身の言語と変化し続ける現代の日本語とを比較するための知識といえる。

子どもを取り巻く環境の変化、特に ICT の普及がもたらす変化は激しい。乳児の枕元に置かれたスマートフォンや抱っこされた子どもの頭近くで使用されるスマートフォンなど、子どもとスマートフォンの物理的距離は極めて近い。2 歳にもなれば、デジタル絵本にふれ、音楽は YouTube で聞くことも多くなるようだ。スマートフォンは、子どもの言語獲得の必需品になっているといえる。では、保育現場での ICT 導入はどの程度進められているのだろう。無論格差はあるが、各家庭の状況に比べると ICT の活用は少ないようだ。その理由として、次のことが推測できる。

- ・ 言葉の獲得は、人との関りの中で行われるのがよい。
- ・ 言語獲得の目的は、話すことの楽しさを知る

ためである。

- ・ 正しい言葉（日本語）は、周囲の大人の会話にふれることで、獲得することができる。

子どもの発達段階を考慮すれば、このような理由に基づく判断は妥当だといえる。何より、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』には、「言葉」の教育の「ねらい」を以下の通り記しているからである。

『保育所保育指針』言葉（ア）ねらい

- ① 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ② 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。
- ③ 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

『幼稚園教育要領』「言葉」教育、「ねらい」

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の考えたことや経験したことを話し、伝え合う喜びを味わう。

各々の「ねらい」に記す内容に注目すると、ICT 導入は就学前の段階では急ぐべきではないとの判断も肯定すべきともいえる。しかし、コロナ感染拡大防止のため、休校が続き教育内容の遅れが生じたことから、文部科学省も教育方法の変革に舵をきらざるを得ないようだ。就学前教育も当然ながら、その影響をうけ、保育現場にも実践に対する意識の変革と指導方法の工夫が要請されるにちがいない。例えば、デジタル技術を活用した「言葉」の教育は、その一つといえるだろう。

3-2 ICT 社会と絵本のデジタル化

保育実践に不可欠なアイテムの一つに絵本がある。絵本は、子どもにとって楽しい玩具であり、言葉獲得に重要な役割を果たす児童文化財である。絵本には、物の絵本・年中行事の絵本・物語を翻案したものや生活習慣に関するものなどがあり、保育現場では自園で過ごす子どもたちの発達に適したものを準備している。中には、ひな祭りやクリスマスなど、子どもたちがこれから催される園の行事を知るための本を用意し、活用されることもあるようだ。子どもは、様々な伝統行事やそれに関わる人々の姿にふれ、同時に多くの言葉と出会うのである。

社会のICT化が普及するまでは、子どもたちが手にする絵本は、冊子で提供されていたが、最近ではネット配信されるものが登場している。『おおかみと7ひきのこやぎ』『ジャックとまめのき』などのように冊子で出版されていた絵本がデジタル配信され、多くの子どもたちが視聴している。新進作家の手による無料投稿サイトもあり、本文の音声吹込みはないが、その作品のイメージに適したBGMとともに配信されている絵本も多数創作されている。一般社団法人国際デジタル絵本学会の事務局は、多言語で視聴できるサイトを立ち上げて、デジタル絵本の活用を支援しているようだ。しかも多くが、個人情報記入の必要はなく無料で視聴できるサイトであることから、保護者の利用は増加し続け、子どもと絵本の出会いは、様変わりし始めているといえるのである。絵本のデジタル化は、子どもの言語獲得の環境を激変させているといえそうだが、保育現場だけがその変化を遮断することは難しく、従来の保育実践をどのように変えるかが課題となるに違いない。そのためには、個々の保育者がICT社会で自身がどのように生きるかを考えることが重要になるの

である。

3-3 デジタル化絵本のメリット・デメリット

デジタル配信されている絵本を保育実践に使用するには、その特徴を把握する必要がある。

次に、想定されるメリットとデメリットを掲出してみる。

【メリット】

- ・いつでも手に取ることができる
- ・気に入ったページだけを何度でも、何分でも見ていることができる
- ・楽しさや疑問に感じた場合、傍らの大人などに伝えることができる
- ・長年月保管することができる

【デメリット】

- ・ネット環境が整わないと読むことができない
- ・子どもが自ら視聴する絵本の選択はできない
- ・子どもが一人で、自分の好きなページに留まる操作が難しい

冊子型デジタル型のいずれであろうとも、言葉獲得が十分でない年齢では、絵本の選択は保護者を含めた大人の嗜好や志向が優先される。子どもが言葉に興味を示し、獲得するためには無論重要な行為ではあるが、明確な選択基準を意識しているか否かが重要になる。とはいっても、実行は難しいだろう。

4. 保育者養成とオンデマンド教育

2020年度は、多くの高等教育機関が前期科目を非対面で実施した。筆者の担当科目も全てが非対面型での実施となり、多くの混乱と課題に向き合うことになった。保育者養成はオンデマンド教育で可能か―授業終了後には、従来の方法も含め、自身の指導法検証が求められた。

4-1 担当科目での取り組み

担当科目「子どもと言葉」は、所属する短期大学で教育職員免許法等及び児童福祉法等に対応するために開講されている。従って、保育士資格・幼稚園教諭二種免許状の取得希望者は、単位取得が必要になる。授業内容は、「保育内容 言葉」の学習に必要な基礎力の獲得を到達目標に定める必要がある。指導に際しては、各受講生が言葉に関する関心を高め、発達段階をベースにした言語獲得の変化を理解することを狙いとしている。以上の観点から、授業の概要と到達目標を以下のように設定している。

概要

絵本に代表される児童文学や童謡などの「言葉」の変化に注目し、児童文化財と言語獲得環境との関係を把握する。併せて、ICT化の社会が、子どもの言語活動にどのような影響を与えるのかを考える

到達目標

1. 「言葉」は人間関係を構築するために必要であることを確認し、言葉を使う楽しさや豊かな表現力について、子どもの発達と関係付けながら考えることができる。
2. 日本語の特徴を児童文化財の歴史・種類を通して確認し、児童文化財を実践で活用することができる。
3. 子どもの豊かな言語感覚を育成できる「言葉」の基礎知識と指導力を身に付ける。
4. 保育の実践に活かせる ICT について考えることができる。

対面授業を前提で作成した計画は、非対面型に切り替える上で、多くの課題を突き付けてきた。課題の多くは、かつてeラーニングのコンテンツを作成し、公開講座や京都コンソーシアムの授業体験を有する筆者の想定を超えたもので

あった。最大の理由は、教養を深める授業には無い公的な制約が免許・資格取得科目には存在するからである。授業の構成を修正するには、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』に定められた内容に沿いながら、非対面型で到達目標を実現する授業のイメージが要請された。『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』の内容で、留意したのは以下の項目である。

『保育所保育指針』

第1章 総則

(2) 保育の目標

(オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。

(2) 養護に関わるねらい及び内容

イ 情緒の安定 (イ) 内容

① 一人一人の子どもの置かれている状態や発達過程などを的確に把握し、子どもの欲求を適切に満たしながら、応答的な触れ合いや言葉がけを行う。

4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項

(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

ケ 言葉による伝え合い

保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しみようになる。

保育内容 エ 言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

③ 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

(イ) 内容

④ 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

(ウ) 内容の取扱い

② 子どもが自分の思いを言葉で伝えとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりでの仲立ちを行うようにすること。

『幼稚園教育要領』（第2章 言葉）

ねらい

(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

内容

(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

内容の取扱い

(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。

対面型・非対面型を問わず、保育者養成には「ことば」に対する興味・関心を深め、自身の言語感覚を問い直す姿勢が重要だと考える。そのためには、科目担当者としては、幼児期の「発達段階と言語獲得との関係の認識」「言語獲得環境の検証」を授業内容に取り入れてきた。しかし、配信時間に制約がある非対面型では、この2つの取り組みが困難であることは、明らかであった。従来の指導法の修正には、設定した2つの指導内容を点検する必要がある。第1の作業として、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』から合致する内容を抄出し、授業を行う上でのポイントに下線を付し、修正にあたっての留意点を確認した。確認した内容は、以下の3点である。

①波線部「言葉による伝え合いを楽しむようになる・絵本や物語などに親しみ」から、「話す楽しさが感じられない環境では、言語獲得は難しい」こと。

②二重線「身近な人と気持ちを通わせる。先生や友達と心を通わせる。興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」から、「発達段階をふまえなければ、十分な言語獲得は難しい」こと。

③実線部「応答的な触れ合いや言葉がけを行う。言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助する。」から、「獲得した言語を発した時に受け止め応答する人が存在しなければ、さらなる言語獲得は難しい」こと。

非対面授業では、保育者として求められる資質能力を養成する場合、以上の3点に絞るべきだと考えたのである。無論③は、保育を実施するためには、重要な姿勢であり、対面型・非対面型を問わず、保育者養成には育成が求められる観点であることはいうまでもない。

4-2 非対面授業の学生評価

非対面授業では、対面授業で準備・配付していた資料等を作成し直すことが必要になった。パワーポイントにナレーションを付け配信するオンデマンドでは、受講生の反応—疑問や困惑・興味喪失などの事態—を想定する必要があるが、不可能であった。当然ながら、その具体的な反応は、授業アンケート結果から推定することになる。³⁾ 担当科目「子どもと言葉」の学生評価は、非対面型の指導法を開発する上での課題を、端的に提示していた。指導法の改善・改革のために、全教科が対面授業で実施された学修成果に目を向けてみた。以下のデータは、2019年度幼児教育学科入学生の1回生終了時点の学習成果を、【総合教養科目：〈建学の精神〉〈現代の教養〉〈キャリア教育〉】と【専門科目】に大別し、調査したものである。

表1 学修成果【学内試験結果】

領域別成績評価	
Q7. 授業の内容を理解できた	
A、当てはまる	(58.03%)
やや当てはまる	(32.09%)
あまり当てはまらない	(7.76%)
当てはまらない	(2.13%)
Q8. この授業で、知識や技術を習得できた	
A、当てはまる	(62.44%)
やや当てはまる	(30.14%)
あまり当てはまらない	(6.17%)
当てはまらない	(1.25%)

https://www.kbu.ac.jp/pub_info/pdf/short/2-7-3.pdf

表1のデータには、担当科目「子どもと言葉」の評価も集約されている。このデータをふまえることで、2020年前期に非対面で実施した当科目の課題の一端が見えてくるだろう。さらに、

「授業評価アンケート結果 2019年度前期」の調査結果も、検証には有効と考える。この調査では、幼児教育学科 専門科目（2学年合計）を対象に、8つの質問項目を設け授業評価を測っている。回収率は73.2%で、専門科目に対する学習者の動向を把握することは可能な回収率だと考える。次に、設定された8項目から、対面授業・非対面授業の比較・検証を行うために、2つの結果を抄出した。

表2、授業評価アンケート結果
幼児教育学科 専門科目（2学年合計）

評価	建学の精神	現代の教養	キャリア教育	基礎知識
秀	34.5%	23.7%	19.8%	16.7%
優	25.5%	30.4%	39.1%	40.4%
良	25.5%	24.7%	30.2%	29.4%
可	14.6%	18.8%	10.6%	13.1%
不可	0%	2.4%	0.3%	0.8%

評価	子ども理解	保育技術	保育内容	保育実践
秀	19.6%	15.1%	10.5%	20.2%
優	27.2%	27.5%	33.4%	80.0%
良	32.7%	35.0%	33.0%	0%
可	20.1%	14.6%	22.8%	0%
不可	0.4%	7.8%	0.3%	0%

無論、この結果は、1回生・2回生が受講する専門科目を合わせた調査結果である以上、自身の担当科目の評価を示しているものではない。2020年度前期終了後に行われた非対面授業についてのアンケート調査では、担当科目「子どもと言葉」の授業評価が明確に示されている。対面・非対面では、当然、アンケート調査項目は異なるが、表2の「Q7」「Q8」は今回も調査項目としている。受講者数126名の調査結果を紹介する。⁴⁾

表3「子どもと言葉」
授業評価アンケート 2020 年前期

問2、この授業の内容を理解できましたか				
1 しっかり理解できた	32.1%	33.3%	22.6%	54.8%
2 まあ理解できた	67.9%	60.6%	74.2%	41.9%
3 あまり理解できなかった	0	3.3%	3.2%	3.2%
4 まったく理解できなかった	0	3.3%	0	0
問4、この授業で新しい知識や技能・技術を習得できましたか				
1 しっかり習得できた	21.4%	36.7%	25.8%	54.8%
2 まあ習得できた	78.6%	60.0%	74.2%	41.9%
3 あまり習得できなかった	0	3.3%	0	0
4 まったく習得できなかった	0	0	0	3.2%

表3の数値からは、大半の受講生は授業内容の理解は出来たということになる。また、新しい知識や技能・技術の習得も出来たといえる。「子どもと言葉」を対面で実施する場合、「子どもの言動の観察⇒観察した子どもの会話をそのまま取り込んだ物語の作成⇒4・5歳児が理解できる言葉に物語を書き換える⇒絵で表現可能な文章は割愛し、可能な限り少ない言葉の物語を完成する⇒作画に物語を書き加える⇒製本作業」を行うことで、獲得した知識を絵本作成の技能・技術として定着することを目指した。非対面では、知識として「子どもの発達段階と言語獲得の関

係」を指導することは可能であったといえそう。それを技能・技術として発展・定着させる機会を設けることは、オンデマンドでは出来なかった。「非対面では出来ない」と断定し、工夫しなかったというのが正しい。

保育者養成の授業において、知識の伝授を重視し、知識習得を到達目標に設定するなら、保育者に求められる能力の養成は出来ない。この科目の到達目標のうち、「～考えることができる」とした項目は、知識の獲得がベースになるが、「～活用することができる」の項目は、技能・技術が伴わなければならないのである。非対面型の授業であっても、保育者養成の科目を担当する以上、オンライン教育の指導法を開発できなければ、デジタル化時代に活躍する保育者の育成に関わることは難しくなるのかもしれない。今回の授業評価アンケートの結果は、それこそが科目担当者が取り組むべき課題であると、厳しく提示していると考ええる。

中坪史典は、2010年に発表した論考「保育・幼児教育の分野における映像実践の最前線－子ども社会研究における映像の可能性－」において、映像を通して保育者が自らの保育実践を検証し、専門性の向上が必要であると述べる。⁵⁾ 同氏の提案から10年を経たにも関わらず、オンデマンドでの授業を経験するまで、「子どもと言葉」を含め、担当する授業内でICTを活用した保育実践を考える重要性を、どれ程認識していたのだろう。佐藤智恵は「保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究－取得資格による比較より－」⁶⁾で、学生の保育観について次のように述べる。

幼稚園教諭免許と保育士資格の取得を目指す学生と小学校教諭免許と幼稚園教諭免許の取得を目指す学生では、異なる保育観を持っていると考えられた。(中略) 今後は、保育者を

目指す学生や、現職保育者の中にどのような保育に対する捉え方があり、それがどのような経験に基づくものかということを、より詳細に検討する必要があると思われる。⁷⁾

保育者を目指す学生は、各々が持つ保育観の実現を目指し入学し、授業や実習を通して自身の保育観を確立させるのだらう。対面・非対面いずれの授業形態であろうと、科目担当者に課せられたことは、保育観の確立を促す授業の構成と指導法の開発といえるだろう。

まとめ

社会人基礎力の一つとしてコミュニケーション能力の育成が求められて久しい。社会の一員として生活するには、他者との関わりを回避することは出来ないからだ。成長とともにそのことに気づきはするが、オンデマンドで繋がる社会になるに従い、対面でのコミュニケーションを回避する事態も起こってきた。コロナ禍の教育現場は、好むと好まざるに関わらず、オンデマンドでの授業を実施し、学生とのコミュニケーションは希薄になったといえる。保育者養成において、その状況がどのような結果として現れるのかと危惧もするが、それにもまして、オンデマンド時代に幼児期を過ごす子どもの言語獲得環境を憂慮する人も多いだろう。社会生活に必要な言語を獲得した学生であっても、授業評価や学習環境の満足度調査では、他者とのコミュニケーションが出来ない状況での孤独感や疎外感などを覚えると回答する者が現れている。今回のアンケート調査結果などからも、対面でのコミュニケーションの重要性を再確認することになった。

保育現場で一日の大半を過ごす子どもにとって、ICTの活用は「対面でのコミュニケーション」を行う上での補助的役割を果たすものであ

ると考える。たとえ、デジタル化された絵本や手遊びが席卷したとしても、それをコミュニケーションの相手にはしてはならないはずだ。言語は周囲の人たちと言葉を交換することにより獲得し、他者との円滑な人間関係を構築するためのツールになりえると考えからである。高等教育機関での授業担当教員や職員の役割とは異なり、保育者の重要な職務の一つは幼児期からの言語獲得環境の整備とコミュニケーションの機会確保といえよう。従って、保育者養成に関わる科目担当者は、対面でのコミュニケーション能力育成を優先した授業計画の検討と指導法の開発に取り組むべきだと痛感する。その取り組みには、社会人である保育者に求められる対面コミュニケーション能力の基準は明確に設定できないことが問題になる。科目担当者はその難問と向き合いながら、対面と非対面での授業の接続を模索しなければならないだろう。知識の伝授はオンデマンドで、技能・技術の習得は対面を中心にと、指導内容の区分をはかりながら授業を展開することで、デジタル化時代に適応できる保育者の養成が可能になるといえるのではないか。

配付資料や情報提供のコンテンツ作成等、膨大な課題の解決を要するが、対面・非対面を併用した授業こそが、今後の高等教育機関での保育者養成には必要になると、保育者養成の責務を担う一教員として考えるのである。

注

- 1) 文部科学省 HP 第3期教育振興基本計画について(答申)(中教審第206号)参照。
- 2) 文化庁 HP 参照。
- 3) 京都文教短期大学の HP には、「在学生の学びの状況」として「学習行動、学習時間、授業評価、学修成果、「育成する力」の達成度、学習に対する意欲・成長実感・満足度」のアンケート調査結果を公開している。

- 4) 非対面授業はオンデマンド形式で4回配信した。31名が3クラス、33名が1クラスで受講した結果、クラス間で、学習成果に差が生じている。対面型でも例年差は生じることから、非対面が原因とは考え難い。
- 5) 子どもと社会研究、第16号 p.89 参照。
- 6) 幼年教育研究年報、第33巻 pp.31—39、2011
- 7) 注6のp.35 参照。

参考文献

- ・佐藤智恵、保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究—取得資格による比較より—、幼年教育研究年報、第33巻 pp.31—39、2011
- ・浅見均、保育者養成の現状と課題—養成環境を中心として—、青山学院女子短期大学・総合文化研究所年報、第26号、pp.19—31、2018
- ・中坪史典、保育・幼児教育も分野における映像実践の最前線—子ども社会研究における映像の可能性—、子ども社会学会編・子ども社会研究、第16号、pp.89—100、2010
- ・林悠子・高橋千香子・高岡昌子・岩本健一、保育者養成に求められる保育者の資質について(2) —就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から—、奈良文化女子短期大学紀要(47)、pp.71—80、2016